

2. 多雪地域におけるニホンザルの適応
3. 行動
4. 第6回ホミニゼーション研究会
5. ニホンザル地域個体群の研究の従来の成果のまとめと今後の進め方
6. 生殖とリズム
7. 脳と行動

8. ロコモーション・ワーキンググループ研究会

9. 霊長類のタンパク質の構造・機能・進化

これらの共同研究課題，研究会に使用された費用は研究員等旅費 689.5 万円，校費 303 万円であった。円滑な共同利用研究活動の発展のためには大幅な増額が望まれる。

(久保田 競)

2. 研究成果

設定課題 1. ニホンザル地域個体群の研究

「ニホンザルの群れ社会におけるおとなのオスの社会的役割」

○ 川中 健二 (信州大・医¹⁾)

ニホンザルの社会構造については，その研究の初期に「群れの同心円的二重構造」とか「クラス」といった概念が提出されているが，その後はこれらの概念はあまり再検討されることなく用いられたり，あるいはあまりはっきりとした論拠を提示することなく否定されたりしている。

ニホンザルの社会について，これらの概念が提出された当時の知見と，現在のそれとの間の最大の相違は，おとなのオスの去就に関するものであろう。ニホンザルの群れには常に複数のおとなのオスが所属しているのは変りない事実である。しかし初期にはそれらのオスが群を離脱したり新たに加入するといった現象はほとんど観察されず，したがってそれは考慮に入れられていなかったのだが，現在ではこれらの現象について多量の資料が収集され，同一の群れに所属しているおとなのオスたちでもその出自は多様であることが知られている。したがって初期に提出された概念に再検討を加えるためには，これらのおとなのオスたちの群れの中での地位や，社会的役割などを明らかにする必要がある。

こういう目的のもとに 10 年以上にわたって餌づけされ，餌れの中で生まれたものも，他から加入したものもすべて完全に個体識別されている志賀高原 A 群を対象として，夏と冬の各 1 回調査を実施した。各期間には，地獄谷野猿公苑の概念図を用意して，毎日 1～1.5 時間ごとに餌さ場とその周辺で見える限り全部の個体をそれに記入し，またその間に各個体の間の交渉の様子を記録した。その結果は多くの点で夏期と冬期とは異なっているので，その変化の意味づけを確かなものにするために，51 年度も引き続いて同じ群れを対象に同様の調査を

おこない，その結果も合せて考察したいと思っている。

上信越山岳地域のニホンザル個体群

○ 好広 真一 (京大・理)

常田 英士 (地獄谷野猿公苑)

汕田よし子 (志賀高原自然史研究会)

ニホンザルの生息域は，主として人間の活動により，また一部は地理的条件によって，様々の程度に分断されている。群れの行き来がないほどに他と分断されたニホンザル個体群の 1 つとして，上信越下岩山系にすむものをとりあげて，森下 (1961) の個体群のとりえ方をあてはめてみると，次の 3 つの段階が設定できる。

1. この地域にすむ個体の全体——大地域の個体群：信濃川，関東平野，白河・郡山盆地，阿賀野川，猪苗代湖で囲まれる。水系としては信濃川水系，阿賀野川水系，利根川水系，那珂川水系，阿武隈川水系に属す，広さ約 20,000km² の地域にすむ全個体を含む。

2. 各水系の流域にすむ個体の全体——小地域の個体群：信濃川水系ならば，横湯川，角間川，松川といった流域の，広さ 10—80km² の地域にすむ全個体を含む。

3. 群れ

大地域個体群を小地域個体群に分けることの妥当性は，次の点による。(1)この大地域の標高 800m 以下は自然林がほとんどなく，1,700m 以上は針葉樹林帯で，2 つの小地域は，少なくとも一部は，利用されることの少ない針葉樹林帯でへだてられている。(2)ニホンザルは川の近くを採食や泊りによく利用する（とくに初冬から初春にかけては顕著である）。(3)最も集中的な調査の行われてきた小地域である横湯川流域には，1970 年以降，A，B₂，C の 3 群が生息しつづけ，これら以外の群れが観察されたのは 1 度しかない。

これら各段階の個体群において構造（分布，個体数など）と機能（接触，交流など）を取り扱った上で，他の大地域個体群との比較を行うことが，ニホンザルの寒冷

1) 現在の所属：岡山理科大学
700 岡山市理大町 1—1

地適応を生態学の面から明らかにする上で有効だと考えている。

論 文

好広真一, 1974. 上信越のニホンザル(1)。モンキー, 139・140: 40-45

好広真一, 1975. 上信越のニホンザル(2)。モンキー, 141: 26-31

学 会 講 演

好広真一・常田英士, 1976. 志賀高原横湯川流域のニホンザルの個体数変動。第23回日本生態学会

屋久島におけるニホンザルの地域個体群の生態学的研究

Q 増井 憲一 (京大・理)
好広 真一 (同 上)
桜井 道夫 (同 上)
福田 史夫 (マカク研究会)
東 滋 (京大・霊長研)
足沢 貞成 (同 上)

(1) ニホンザルの生活を環境との関係において把握することを目的として、屋久島西部(研究林予定地)に生息するニホンザル自然群を対象に、

- 遊動, 群れサイズ, 行動の夏季と冬季の比較
- 島内でも冬期には降雪をみる地帯にすむ群れの垂直分布の調査
- 遊動中など自然状態におけるニホンザルの行動, 音声などの観察・記録
- 生息環境の調査

をおこなった。

(2) a. 西部村道集中調査と登山道センサス。

b. 多方面の資料収集。

c. 国割岳西斜面に観察ルート設置。

調査の経過: 50年7月16日上屋久町永田着。17日, 西部林道半山に Camp 設営, 8月9日まで Base Camp とし, 海岸ぞいに永田から瀬切川までの約 10 km の区間にて, 群れの分布, サイズ, 遊動, 食性などの調査を集中的におこなった。調査には, グループメンバーの5名と対応者の東のほか, 多くの人々が参加し, 延14名となった。8月10日から14日までは, 1パーティーは, 安房から屋久杉ランドの餌付け群観察へ向い, 1パーティーは, カンカケ岳より国割岳に向って, 垂直分布調査に出发したが, ヒル, 蚊, 雷雨のため, 国割岳直下より引き返さざるをえなかった。

結果: 屋久島西部林道には, 6~7群が隣接して生息している。このうち, 5群について, 頭数と構成が調べら

れた。サイズは, 15~50頭であった。調査期間中, サルたちは, アコウの実にその食物を強く依存しており, 遊動範囲は, 極めて小さかった。

資料はまだ整理中であるが, 昨年の調査分とあわせて, 全ての記録をまとめて雑誌「にほんざる」に発表の予定である。今回の調査によって, 西部林道における群れの分布はほぼ確実に把握しえたと考えられ, 今後は, 季節的变化とサルの生活との関係など, 1つ1つのテーマごとに集中的調査をすすめてゆくことが可能になったと言えよう。

房総丘陵・高宕山地区・石射太郎餌場に出るニホンザルの社会学的・生態学的研究

○

上原 重男 (京大・理)

岩野 泰三 (東大・理)

福田喜八郎 (東大・農)

高宕山地区石射太郎餌場のニホンザルT-I群は, 天然記念物であるにもかかわらず不法な攻撃にさらされてきたため, 従来から個体群の動態や個体間関係に注目して調査研究をおこなってきたが(研究成果1, 2参照), ここでは最近とりまとめたニホンザルのフンの形態的変異について報告する。

従来フンの調査は房総丘陵の全域を対象にしてきたが, 一般の野外で採集されるフンは排泄後の時間経過がまちまちで厳密な比較研究が難しく, また形態変化が著しい場合他の動物との識別が困難となりがちである。

この点石射太郎餌場の餌付け群は野生味を比較的良好に保存する理想的な研究対象であるため, 1975年度を通じてこの群れを主たる対象にフンの形態を調べた。

ニホンザルのフンの形態にはかなりのバラツキがみられ, 特に冬期の三角むすび形のフンはよく知られている。このようなバラツキを, フン構成物質の原形保持能力と消化管内のフン塊形成作用の2因子から生成論的に一貫性のある類形区分を試み, 8類形を認め, 各類形別頻度分布の周年的変化を調べた。

フンの形態的変異は各月ともかなり著しいが, 頻度分布のモードの位置にはすでに知られた食性の周年的変化と対応する季節的な特徴がみられる。すなわち, 生理的に活性化した冬芽ないし枝先食いの2・3・4月に典型的な三角むすび形のフンが多く, 若草食いの目立つ5・6月に軟便でやや大型の平滑円筒形のフン(しばしば鮮緑色ないし鮮黄色)が多い。他の時期には中間的な位置にモードが現われる。

研 究 成 果

1. 長谷川寿一・平岩真理子, 1976. 高宕山第I群調査報告(2) グルーミング行動からみた社会関係。第20回プリマーテス研究会。